



Title	Modalverbenの表わす意味と記述について
Author(s)	神, 久聡
Citation	独語独文学科研究年報, 4, 15-35
Issue Date	1978-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25510
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_P15-35.pdf



Modalverbenの表わす意味と記述について

神 久 聡

0. 序

言語学の課題のひとつは、人間が有限の規則に基づいて無限の文法的な文を創り出す能力を説明することである。このための理論として変形生成文法が登場(Chomsky・1957)して以来、修正を受けたり、対立する理論が提案されたり、更に論理学からも光を当てられるなどして、いくつかの文法理論が相補しつつも、対立する形で提出されている。

変形生成文法のひとつに、生成意味論(McCawley・1968a, G. Lakoff・1969 a, b等)がある。粗い表現をするなら、(拡大)標準理論(Chomsky・1965, 1970 a, b)が表面的統語構造に近い分析なのに対し、生成意味論では、より抽象化された意味構造分析、統語と意味とを統括する分析を目指していると言えよう。

本稿では、F. Antinucci/D. Parisi(1971)に示唆を受け、ドイツ語Modalverbenの基本的、体系的意味分析を行ない、その分析をもとに生成意味論の手法を用いてModalverbenの意味構造(基底構造)の記述を試みる。

対象とするModalverbenは、dürfen, können, mögen, müssen, sollen, wollenとし、Modus, Tempusと関連する問題には立ち入らないこととする。

1. MVについてのいくつかの特徴

Duden Grammatikなど伝統文法をもとにModalverben(以下MVと略記する)の統語的意味的特徴を概略すると共に、本稿での意味分析の視点を予見しておきたい。

MVは伝統的に助動詞として取扱われるのであるが、その行動には本動詞とかわりない面がみられ、次のようにまとめられる。

MVの変化形はwissen同様、Präteritopräsensの変化形に属する。MVはzu-Infinitiv; 例文(1)、Perfekt, Partizip Perfekt; (2)、(3)が可能である。二つ以上重ねて用いることが可能である(4)。単独で用いることが可能である(5)。疑問文をつくる際文頭に位置するが、本動詞の場合と同様である(6)(7)。空所化の現象が見られる(8)(9)、などである。

一方、MVには、命令形が不可能である。また位置に関する制約があり、たとえば副文では、基本的に Hauptverben、受身の werden、MV、未来の werden という語順が定まっているなどの面は、MVに特有の現象である。

なお本動詞と同様の行動をする点は、MVを本動詞として扱う分析(2・2)の論拠とされる。

- (1) Wir scheinen diese Regel widerlegen zu können.
- (2) Er hat ins Kino gehen dürfen.
- (3) Er hat es gedurft.
- (4) Ein Richter muß es entscheiden können
- (5) Er kann Deutsch.
- (6) Geht er ins Kino?
- (7) Darf er ins Kino gehen?
- (8) Anna lernt Französisch, Hans Japanisch.
- (9) Anna muß Französisch lernen, Hans Japanisch(lernen).

MVはそのあらゆる意味に特徴があり、まずそれぞれのMVの客観的用法と主観的用法によって意味が異なる。次の例文では(10)が客観的用法、(11)が主観的用法のMVといわれる。

- (10) Ich muß zu Hause bleiben. (私は家に居なければならない)
- (11) Er muß krank gewesen sein. (彼は病気だったに違いない)

一般に客観的用法の場合には、文主語と不定詞で述べられている事態を引き合いに出し、必然、義務、能力、許可、意志などがあらわされる。これに対し、主観的用法の場合には、文主語と不定詞で示される事態の実現(存在)に対して、話者の主観的な推察、疑念(の態度)の意味があらわされる。

Dudenによれば、客観的用法のMVは意味的に二つのグループに大別される。

、'Möglichkeit-Notwendigkeit'を示すグループと、'eigener Wille-fremder Wille'を示すグループである。前者は(12)-(15)、後者は(16)-(17)の例があげられる。

- (12) Ich kann morgen kommen.
- (13) Hier darf man rauchen.
- (14) Du magst umziehen.
- (15) Er muß jeden Morgen um 6 Uhr aufstehen.
- (16) Du sollst sofort kommen.
- (17) Der Vater will am Samstag arbeiten.

Möglichkeit については、ある特定の条件、前提(例えば能力がある、実現する機会があるなど)のもとで「可能」ということであり(Duden S. 68)、また Notwendigkeit については、文主語一不

定詞で示される事態が必然的に生じる（存在する）ための条件が存在する（Duden S,69）ものと考えられる。このことから、Möglichkeit-NotwendigkeitのグループのMVについて、背後に何らかの「条件」が関与していることが考えられそうである。なおいわゆる「許可」をあらわすMV（dürfen, können, mögen）については、主語-不定詞で示される事態が実現可能と伝達されていると考えられることから、「許可」と「可能」とを意味的に結びつけて考えることが出来そうである。

eigener Wille-fremder Willeのグループに属するwollen, sollenについては、sollenが、Notwendigkeitを示すと考えられるので、同グループのwollenについても意味的関連を考慮できそうである。結果的に、客観的用法のMVは相互に意味的関連を持っているのではないかと予想される。

主観的用法のMVは、Vermutung-Annahmeを示すグループ(18)–(20)と、Stellungnahme zu einer Äußerungを示すグループ(21)–(22)に大別される（Duden）。

(18) Er kann das Geld verloren haben.

(19) Er mag etwa 40 Jahre alt sein.

(20) So muß es gewesen sein.

(21) Karl soll dort gewesen sein.

(22) Er will dort gewesen sein.

主観的用法のMVについても話者の推察（の態度）という面を中心に意味的関連が考慮できそうであり、意味分析を通して、MVの全体的意味体系を考察できるのではないかと予想される。

以上の特徴が考えられるMVがどのように記述されるのか次章以下で考察する。

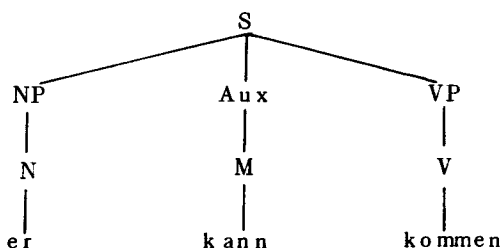
なお、主観的用法でdürfenは接続法の形をとるが、本稿では接続法については考察しないので、主観的用法のdürfenは考察対象にしない。

2. 「本動詞」として扱われるMV

2.1 標準理論（1965）では、MVは動詞補助語句（Auxiliaries, Aux）という範囲に組み込まれている。しかしながら標準理論では、深層構造の文法関係が、意味解釈するのに必要十分な意味情報を提供しているものと考えられているにもかかわらず、MVに関して、深層構造の意味情報では解釈出来ない場合がある。(23)の深層構造は概略(24)で示される。（1965年のモデルを利用、Tempus, Aspektは考慮しない。）

(23) Er kann kommen.

(24)



しかし(23)には二通りの読みが可能である。日本語に訳せば、「彼は来ることができる」と「彼は来るかもしれない」との二通りの読みである。前者は客観的用法のMVの読み、後者が主観的用法のMVの読みと見なされる。この読みの違いを深層構造(24)は示していない。つまり、意味の異なる二文が全く同一の深層構造から派生されるとは考えられない。これは、MVをAuxの範ちゅうに入れることによって生じる標準理論の弱点と考えられよう。

2.2 意味と統語の双方にかかわる上述の問題は、深層のレベルで、MVを本動詞の範ちゅうに組込むことによって解決できるとする生成意味論派の主張がある。MV(Aux)を深層で本動詞と解釈する¹⁾ものに、Ross(1969) „Auxiliaries as main verbs“がある。Rossは、ドイツ語の統語的意味的特性をふまえ、Auxの範ちゅうに組入っていた要素(tense modal, aspectなど)を個別言語の枠を越えて普遍的に深層構造での本動詞としてとらえた。Rossによれば、客観的用法のMVを持つ文、

(25) Ottokar muß singen.

は概略次の基底構造から導びかれ、

(26) Ottokar muß [es[Ottokar singt]S]NP

一方主観的用法のMVを持つ文

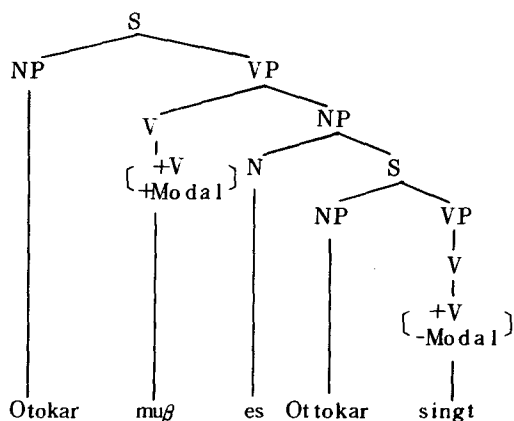
(27) Ottokar muß Krebs haben.

は(28)に示される基底構造から導びかれる。

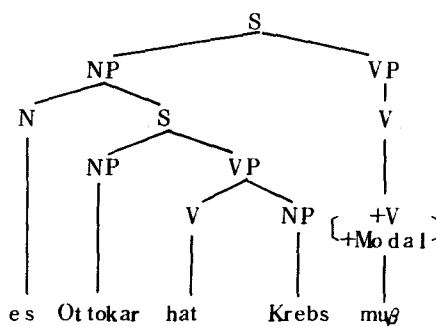
(28) [es[Ottokar hat Krebs]S]muß

(26)および(28)はそれぞれ構造樹形図(26)および(28)で表わされる。

(26)



(28)

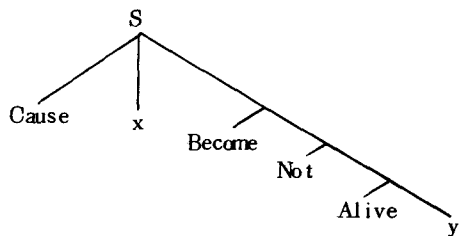


客観用法の *müssen* は(26)では他動詞として、主観用法の *müssen* は(28)で自動詞と解釈され、*müssen* の二義性が構造記述の中で明らかになっている。この二通りの記述法は、他のMVにも適用される。MVが深層で本動詞の扱いを受けることによって、MVは統語的にも意味的にも矛盾なく説明され、標準理論と比べ妥当な記述と考えられる。(注2)

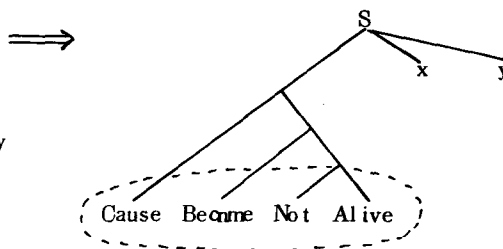
さて、MVが本動詞であると解釈されたことによって、MVは生成意味論における動詞と同様の記述が可能となる。(注3)

生成意味論では、動詞はいくつかの *semantic primitive* (意味原素)に分解され、意味原素は意味素性によって表わされる。基底構造で意味原素は *Predicate* (*Prädikat*, 述語)として表わされる。例えば英語動詞 *kill* には(29)の基底構造がたてられる。述語上昇変形の結果(30)が派生され、意味原素の束となった部分(点線で囲まれている)に *kill* が挿入され *x kill y* が生み出される。(注4)なお *Cause*, *Become* などは *Prädikat* として用いられている。

(29)



(30)



MVの場合も同様、意味原素に分解して表わすことが可能であり、MVの基底構造を述語形式の意味表示で表わすことが可能と考えられる。なお本稿ではMVの意味記述に焦点をあてており、変形の問題については立ち入らない。

3. MVで示される意味と意味構造

MVには主観的用法と客観的用法があり、意味が異なるという事実がある。この章では、用法ごとにそれぞれのMVの意味を分析し、意味構造をとらえ、MV全体の意味体系を明らかにしたい。

3.1 客観的用法のMV

(31) Er muß umziehen.

(32) Er zieht um.

(31) では命題文((31) の muß を除いた文・(32) で示される) で示される事態が必然的に存在する(実現される)ことが伝達される。また、「必然的に存在する」ことに対する条件(理由)が、(31) では非明示的ではあるが、言外に存在すると考えられる。

(33) Er muß umziehen, um zu heiraten.

(33)では、um… が条件(目的)として認められる。すなわち、命題文(er zieht um)で示される事態は必然的に存在し(実現され)、しかもこれは、条件(理由)(um…)が引きおこすということが伝達されている、と考えられる。事態の存在を引きおこす条件(理由)などをAgent(動作主)^{注5)}で表わすことにすると、(31)で何らかのAgentは、命題文で示される事態が必ず存在することを引きおこす、ということが伝達されていると解釈される。ここで、命題文で示される事態の存在が必然的であることから、この意味特性を[NOTWENDIG]で、Agentが…引きおこすという意味特性を[VERURSACHEN]で示すことにする。([...]は意味原素として使っている)。[VERURSACHEN]は上記の説明から[NOTWENDIG]に先行する原素と考えられる。müssenに現われる意味はこれらの意味原素を用い、次の公式で示される。

(34) müssen : [VERURSACHEN][NOTWENDIG]

なお、müssen 文で想定される Agent は総じて何かの状況 (Umstände) と考えられる。

次に können 文

(35) Er kann umziehen.

(35) では、命題文で示される事態の存在 (実現) が可能であることが伝達されていると解釈される。ここでは更に müssen の場合と同様に、その事態の存在 (実現) が可能となるための何かの条件 (理由) つまり Agent を想定するのが妥当と思われる。Agent は (35) では非明示的であるが、例えば (36) では、(denn …) で示される理由が Agent として認められる。

(36) Er kann umziehen, denn sein neues Haus ist gebaut worden.

つまり denn 文で示される理由 (Agent) が、命題文で示される事態の存在の可能なことを引きおこしていると解釈できると思われる。命題文で示される事態の存在 (実現) が可能であるという意味特性を [MÖGLICH] で、Agent がその事態の存在 (実現) が可能であることを引きおこすという特性を [VERURSACHEN] で示すことにする。上の解釈から、[VERURSACHEN] は [MÖGLICH] に先行すると考えられ、können で示される意味は、二つの意味原素を用いて

(37) können : [VERURSACHEN][MÖGLICH]

と表示されよう。Agent はここでは Umstände と考えられる。Umstände には例えば主語のもつ能力なども入る。

なお、können は dürfen の代りとして用いられる場合がある。いわゆる許可を表わす können であるが、これについては dürfen のところで扱うこととする。

müssen, können の例から、それぞれにあらわれる意味を (34)、(37) で示したが、この表示は他の客観用法の MV にも適用できそうである。

(38) Du darfst umziehen.

dürfen には一般に許可という意味が表わされるといわれるが、dürfen にあらわれる意味を次のように分析できるとと思われる。話者 (又は不特定の誰か) が許可という態度をとることによっ

て、命題文で示される事態の存在（実現）が可能であることが伝達されている。命題文で示される事態の存在（実現）が可能であるという意味特性を〔MÖGLICH〕、話者（又は不特定の誰か）の許可の態度（Agent）が事態の存在を可能にしているという特性を〔VERURSACHEN〕でそれぞれ示す。dürfen の表わす意味は、

(39) dürfen : 〔VERURSACHEN〕〔MÖGLICH〕

で示されよう。können, dürfen は同じ意味表示を受けているが、ニュアンスは異なる。この違いは、Agent の違いに依る。すなわち dürfen の場合の Agent は許可の態度をとる話者（不特定の誰か）であり、一方 können (35) の場合は Agent は Umstände ととらえることができる。この Agent の違いによって MV のニュアンスが変わってくると思われる。

ところでいわゆる許可を表わす MV に können と mögen がある。(35) の können と 区別する為 (40) では können₂、前者 (35) を können₁ で示す。

(40) Du kannst₂ umziehen.

(41) Du magst umziehen.

この können, mögen で示される意味特性は dürfen と同様と考えられ、

(42) können₂ : 〔VERURSACHEN〕〔MÖGLICH〕

(43) mögen : 〔VERURSACHEN〕〔MÖGLICH〕

と示されよう。しかし (39) (42) (43) では同じ意味表示となっているが、dürfen, können, mögen ではそれぞれニュアンスが異なる。このニュアンスの違いは、それぞれの MV に想定される Agent の性質によるものと思われる。これら 3 MV の Agent は基本的に話者（又は不特定者）と考えられるが、Agent のとる許可の態度に差が認められよう。

Autorität (Leech 1969. S205 ff. から転用) は、dürfen に強く、mögen には弱く、反映され、können に反映されない。また、命題文で示される事態の実現に対する関心・責任 (Verantwortlichkeit) は、dürfen には反映されるが、mögen, können には反映されない。逆に、無関心 (冷淡) は mögen, können に反映され、dürfen には反映しない。Agent が許可の態度をとる場合に用いられる 3 MV の違いは次の表にまとめられる。

(44)

Agentの態度・性質	MV		
	dürfen	mögen	können
Person	+	+	+
Autorität	+	±	-
Verantwortlichkeit	+	-	-
Unverantwortlichkeit	-	+	+

この違いは、dürfen, können, mögen の3MVを区別する条件となる。

(45) Er soll umziehen.

(45) では、命題文で示される事態が不特定者（又は話者）がその事態の実現を要請することによって、実現（存在）することが必然的に引きおこされるということが伝達されていると解釈されよう。これを〔NOTWENDIG〕と〔VERURSACHEN〕で示すことができよう。ただし、sollen の場合、実現（存在）を引きおこす主体（Agent）は、非明示的な不特定者（又は話者）が想定される。sollen で表わされる意味は次のように表示される。

(46) sollen : 〔VERURSACHEN〕〔NOTWENDIG〕

次に wollen については、

(47) Er will umziehen.

命題文で示される事態を文主語（命題文主語）が実現させようとする、即ち、命題文で示される事態の実現を、文主語が引きおこすことが伝達されていると解釈されよう。したがって、wollen で示される意味は、〔NOTWENDIG〕、〔VERURSACHEN〕で表わされよう。ここでこのAgentは、命題文主語であり明示的である。またこのAgentは一般に人間（有性）と認められよう。wollen で示される意味は次のように表わされる。

(48) wollen : 〔VERURSACHEN〕〔NOTWENDIG〕

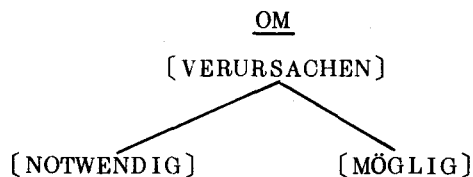
以上の *müssen*, *sollen*, *wollen*, では基本的意味を示す一般式は同じであるが、この三者を区別する条件は、Agent にある。それぞれの MV の分析から、Agent の性質の違いは、次の表にまとめられる。

(49)

MV \ Agent	<i>müssen</i>	<i>sollen</i>	<i>wollen</i>
Umstände	+	-	-
Human	-	+	+
命題文主語との一致	-	-	+

以上、客観的用法の MV に表わされる意味を分析してきたが、この用法の MV の意味は、次の図の意味原素の組合わせによって示される。

(50)



(OM : 客観的用法の MV)

3.2. 主観的用法の MV

主観的用法の MV では、話者の推察（推量）の態度が表わされ、それぞれの MV によって推察に対する確信の度合いが示される。

(51) Er muß einen Schock erlitten haben.

(51) では、命題文 (er hat einen Schock erlitten.) で示される事態の実現（存在）を話者が推察しており、しかもその推察は必然的（不可避的）であるということが伝達されていると解釈・分析できると思われる。更に (51) では、非明示的ではあるが、話者の推察を必然的にしている Agent を想定することができると思われる。ここでは何らかの状況 (Umstände) が Agent と考えられよう。

以上の解釈から、話者が推察することを〔VERMUTEN〕、推察が必然的であることを、〔NOTWENDIG〕、また、Agentが推察を必然的にしていることを、〔VERURSACHEN〕で表わせば、müssenで示される意味を次のように表わすことができよう。

(52) müssen : 〔VERURSACHEN〕〔NOTWENDIG〕〔VERMUTEN〕
(Agent は Umstände)

(53) Er will einen Schock erlitten haben.

このwollenは、主語の主張とか、話者の疑念の態度を表わすなどといわれるMVである。
(53)は一応次のように言い替えられると考えられる。

(54) Er will glauben machen, daß er einen Schock erlitten hat.

つまり(53)で伝達されているのは、話者が命題文で示される事態の実現(存在)を必ず推察することを、文主語が引きおこそうとしていることであると解釈・分析されよう。したがって、wollenで示される意味は、müssenの場合と同様、〔VERURSACHEN〕、〔NOTWENDIG〕、〔VERMUTEN〕で表わすことができよう。条件として、wollenの場合、Agentは命題文主語(人間)と認められる。

(55) wollen : 〔VERURSACHEN〕〔NOTWENDIG〕〔VERMUTEN〕

次にsollenで示される意味を考察する。

(56) Er soll einen Schock erlitten haben.

このsollenは、話者が他人の主張を伝聞として伝える場合に用いられるが、(56)で伝達されているのは次のことである。すなわち、話者が命題文で示される事態の実現(存在)を推察することを、非明示的な不特定者(の主張)が引きおこしていると解釈されよう。したがってsollenの場合も、müssen, wollen同様、〔VERURSACHEN〕、〔NOTWENDIG〕、〔VERMUTEN〕によって意味を表わすことができよう。しかし、sollenの場合、Agentは不特定者と認められる。sollen全体の意味は次のように表わされる。

(57) sollen : { VERURSACHEN } { NOTWENDIG } { VERMUTEN }

最後に、können, mögen について考察する。

(58) Er kann einen Schock erlitten haben.

(59) Er mag einen Schock erlitten haben.

(58) (59) で用いられている主観的用法の können, mögen は、その示す意味の重なりが著しいと思われ (F. Raynaud 1977, S24 ff) 互いに入れ替えて用いることも可能と考えられる。今のところ、この können, mögen を意味的に明確に区別する基準が見出せないで、まとめて分析することにする。

(58) (59) では、命題文 (Er hat einen Schock erlitten.) で示される事態の実現 (存在) を話者が推察することが可能であることが伝達され、更に、推察の可能性は、文には非明示的であるが、言外に想定しうる何らかの Agent (ここでは Umstände と認められよう) によって引き起こされると解釈・分析できると思われる。話者の推察を { VERMUTEN }、推察の可能なことを { MÖGLICH }、推察の可能性を引き起こすことを { VERURSACHEN } で示せば、können, mögen で示される意味は次のように表わされよう。

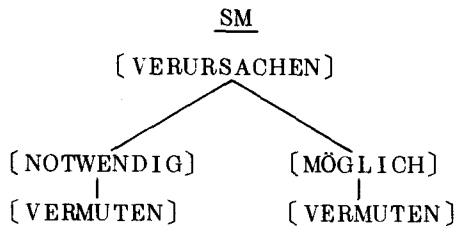
(60) können : { VERURSACHEN } { MÖGLICH } { VERMUTEN }

(61) mögen : { VERURSACHEN } { MÖGLICH } { VERMUTEN }

(Agent : Umstände)

主観的用法の MV で示される意味は、次の図の意味原素の組合わせによって示される。

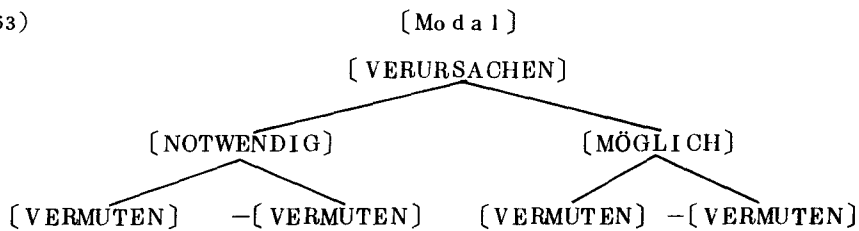
(62)



(SM : 主観的用法の MV)

客観的用法の MV、主観的用法の MV で示される意味は、(50) (62) から、次の図に示される意味原素の組合わせによって体系的に表わされよう。

(63)



また、上記の意味原素の組合わせによって示される個々のMVの意味、付随する条件をまとめると次のように図示されよう。

(64)

意味原素	MV		OM					SM				
	mü	so	wo	kö	dü	köz	mö	mü	so	wo	kö	mö
[VERURSACHEN]	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
[NOTWENDIG]	+	+	+	-	-	-	-	+	+	+	-	-
[MÖGLICH]	-	-	-	+	+	+	+	-	-	-	+	+
[VERMUTEN]	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+
(Agentに関する条件)												
Umstände	+	-	-	+	-	-	-	+	-	-	+	+
Person	-	+	+	-	+	+	+	-	+	+	-	-
命題文主語と一致	0	-	+	0	-	-	-	0	-	+	0	0
Sprecherと一致	0	+	+	0	+	+	+	0	0	0	0	0
Autorität	0	0	0	0	+	-	±	0	0	0	0	0
Verantwortlichkeit	0	0	0	0	+	-	-	0	0	0	0	0

OMは客観的用法のMV，SMは主観的用法のMV

mü: müssen

なお kö₁ は(35)、kö₂ は(40)の können に該当する。

so: sollen

wo: wollen

kö: können

dü: dürfen

mö: mögen

以上の分析からMVの示す意味について次の事項が明らかにされたと考えられる。

- 1) すべてのMVは〔NOTWENDIG〕又は〔MÖGLICH〕で示される。
- 2) すべてのMVには、必然性又は可能性を引きおこす要素(Agent)の存在を想定することができ、〔VERURSACHEN〕で示される。
- 3) 主観的用法のMVでは話者の推察が表わされ、〔VERMUTEN〕で示される。
- 4) MVの区別は、意味原素の組合せだけでなく、Agentのもつ性質によって定められる。

3.3 基底構造記述

次にMVの基底構造(意味構造)の記述を考えてみたい。本稿では生成意味論の記述方法を応用する。既出の意味原素を述語(Prädikat)に応用し、基底構造の記述を試みる。

必要な Prädikat は、(63)に示される意味原素をもとに設定される。

命題文で示される事態の実現(存在)が必然(又は可能)であるという意味は、一項述語形式で(65)(66)と表示される。

(65) NOTWENDIG_X

(66) MÖGLICH_X

Agent が、命題文で示される事態の実現(存在)を引きおこす意味は、二項述語形式(67)で表示される。

(67) VERURSACHEN_XY X : Agent

また、主観的用法のMVにあらわれる、話者が推察する意味は、二項述語形式で表示される。

(68) VERURSACHEN_XY X = Sprecher

MVの基底構造は(65)－(68)を用いて記述できると考えられる。

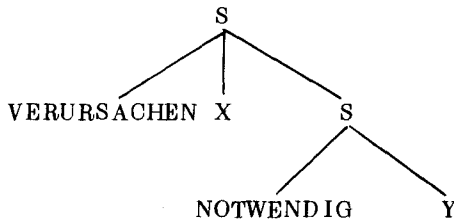
客観的用法のMVの場合、VERURSACHEN_XY のY項に、NOTWENDIG_X / MÖGLICH_X を代入することによって基底構造の一般式が得られる。

(69) VERURSACHEN(X)(NOTWENDIG(Y))

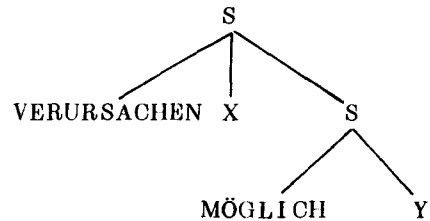
(70) VERURSACHEN(X)(MÖGLICH(Y))

これは樹形図では次のように示される。

(69)'



(70)'



例文を用いて記述をする。

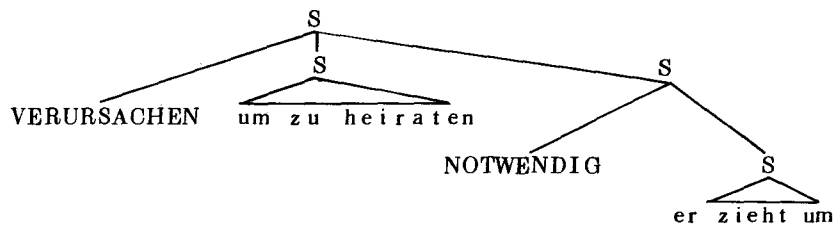
(71) Er muß umziehen, um zu heiraten.

(71) の命題文は、er zieht um であり、Agent は、意図 (um zu heiraten) である。したがって文 (71) の基底構造は (72) で示される。

(72) (71) = VERURSACHEN(um zu heiraten)(NOTWENDIG(er zieht um))

樹形図では次のように描かれる。

(72)'



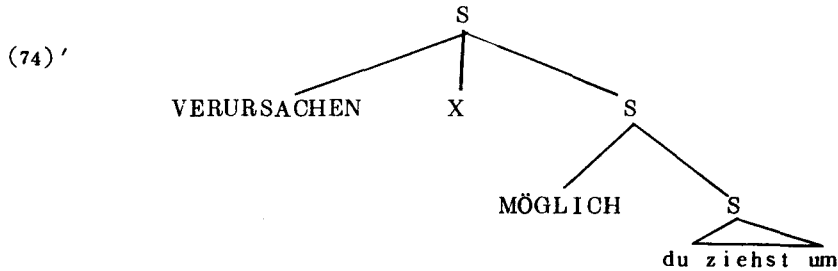
(73) Du darfst umziehen.

(73) の基底構造式は (74) で表わされよう。

(74) (73)=VERURSACHEN(X)(MÖGLICH(du ziehst))

条件・X: Sprecher od. Jemand(非明示) [+Autorität]

樹形図では次のように描かれる。



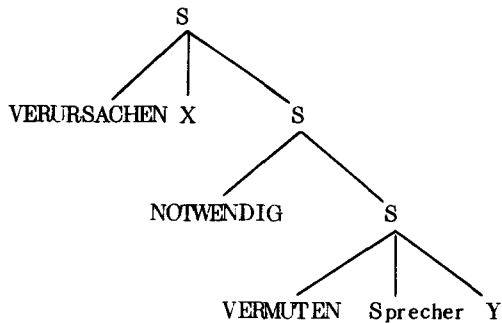
主観的用法のMVの場合、話者の推察が必然的であるか又は可能であるかが問題となると考えられた。したがって話者推察の意味を表示する、VERMUTEN_{XY} (X=Sprecher)は、NOTWENDIG_X/MÖGLICH_Xの変項Xに代入される。主観的用法のMVの基底の一般式は、

(75) VERURSACHEN(X)(NOTWENDIG(VERMUTEN(Sprecher)(Y)))

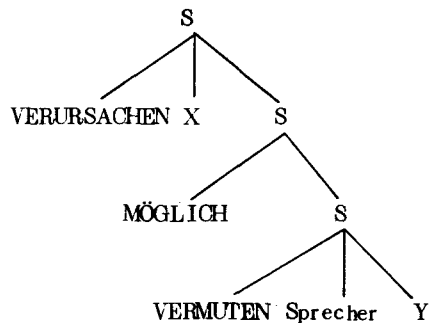
(76) VERURSACHEN(X)(MÖGLICH(VERMUTEN(Sprecher)(Y)))

で表わされよう。樹形図は次のように描かれる。

(75)'



(76)'



例文を用いて基底構造の記述を行なう。

(77) Er will einen Schock erlitten haben.

(78) Er mag einen Schock erlitten haben.

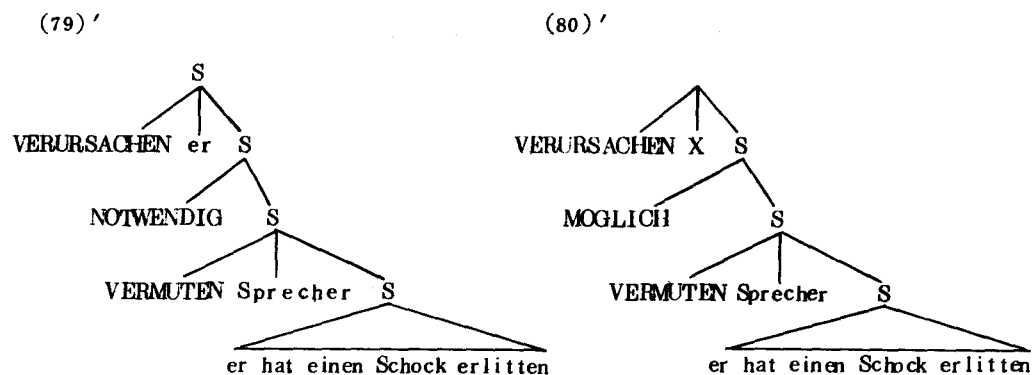
(77) の基底構造式は (79) で、(78) の基底構造式は (80) で表わされる。

(79) (77)=VERURSACHEN(er)(NOTWENDIG(VERMUTEN(Sprecher)(er hat einen Schock erlitten)))

(80) (78)=VERURSACHEN(X)(MÖGLICH(VERMUTEN(Sprecher(er hat einen Schock erlitten)))

X: Umstände (非明示)

樹形図ではそれぞれ次のように描かれる。



以上四例についてのみ基底構造記述を行ったが他の例文についても同様に基底構造記述がなされよう。なお基底構造の一般式は(69) (70)、(75) (76)をまとめて(81)と(82)で示される。前者が客観的用法の、後者が主観的用法のMVの基底構造一般式である。

(81) VERURSACHEN(X)({ NOTWENDIG
MÖGLICH } (Y))

(82) VERURSACHEN(X)({ NOTWENDIG
MÖGLICH } (VERMUTEN(Sprecher)(Y)))

なお、具体的にどのMVが定められるかについては、変項X (Agent)のもつ特性によって決定され、またニュアンスの違いも定められると考えられる。Agentについての条件などは3・2・で図示(64)した通りである。

4. ま と め

本稿では、MVに示される意味体系をとらえることを試み、更に得られた意味体系をもとに、生成意味論の手法にしたがって、MVの意味構造（基底構造）の記述を行なった。この中で、MVに示される意味は、〔VERURSACHEN〕,〔NOTWENDIG〕/〔MÖGLICH〕, ±〔VERMUTEN〕で示される意味原素の組合せによってできる束で表わされることが明らかにされた。また、基底構造は3.3.で述べたように、基本的に4種の基底構造式に収斂し、個々のMVは、Agentの特性によって定まることが明らかにされたと考えられる。

なお、MVの意味解釈について、拡大標準理論（解釈意味論）（1970ab）では、深層構造から表層構造までの意味情報を入力とし、意味部門で十分な解釈・意味表示ができると主張されている。これは（拡大）標準理論で設定した深層構造、意味部門を認めず、文の生成は意味表示に始まり、直接、表層の音構造（表層構造）が導びかれるとする生成意味論との対立点である。この生成意味論と解釈意味論との論争は決着をみていない。

しかしMVに関しては、生成される深層構造ないしは基底構造に、意味情報が十分に与えられているか、意味が表示されているか、という点では生成意味論に分があると考えられる。また、意味表示は、解釈意味論でも生成意味論と殆ど同様に表示することも可能と考えられ、この場合、意味部門で意味解釈をして意味表示を行う手順をふむ解釈意味論と比べ、初めから意味を表示している基底構造が生成されると仮定する生成意味論の方が、事象の説明力の面でも一歩先んじているように思われる。しかし両論に対する全体的評価はなお今後の課題である。

注

- 1) 1で述べたようにドイツ語のMVは本動詞と同様の行動が見られる。これはMVを本動詞とする分析の根拠とされる。一方MVを独立した範ちゅうとする分析を支持する側の有力な根拠としてあげられるのはMVの位置に関する制約である。これは、意味的な制約ではなく純粹に統語論上の問題であり、MVを本動詞とする分析では説明できない。本動詞論について、詳しくはRoss（1969）参照。
- 2) 標準理論を修正した拡大標準理論（解釈意味論）では、深層構造から表層構造までの意味情報を入力とし、意味部門で意味解釈・意味表示が十分可能と主張されている。Chomsky（1972）参照。またこの立場の意味解釈・表示についてJackendoff（1972）も詳しい。
- 3) MVを本動詞として扱う分析に基づいて、Fillmoreの格文法（1968）に応用して分析・

記述したものに Calbert (1971, 1975) がある。詳しくは同論文参照のこと。

4) J. D. McCawley (1968b, 1973) 参照。

5) 'Agent' は一般に人間などの有生と目される対象に用いられるが、ここでは、事態の存在を引きおこすもの一般に対して用いている。

参 考 文 献

- Antinucci, F. und D. Parisi 1971; „On English Modal Verbs“. In: Papers from the Seventh Regional Meeting, Chicago Linguistic Society, S. 28-39.
- Bech, Gunnar 1949, „Das semantische System der deutschen Modalverba“. In: TRAVAUX DU CERCLE LINGUISTIQUE DE COPENHAGUE, vol. IV, Copenhagen, S. 3-46.
- Calbert, J. P., 1971, „Modality and Case Grammar“. In: Working Papers in Linguistics Ohio 10, S. 85-132.
- 1975, „Toward the Semantics of Modality“. In: Calbert/Vater (Hrsg.), Aspekte der Modalität, Tübingen: Verl. Gunter Narr, S. 1-70.
- Chomsky N. 1957, Syntactic Structures, Mouton.
- 1965, Aspects of the Theory of Syntax. Cambridge, Massachusetts: M. I. T. Press.
- 1970 a, „Remarks on nominalization“. In: Jacobs Rosenbaum (Hrsg.), English Transformational Grammar. Waltham, Mass., Blaisdell, s. 184-221.
- 1970 b, „Deep structure, surface structure and semantic interpretation“. In: Jakobson/Kawamoto (Hrsg.), Studies in General and Oriental Linguistics. Tokyo, TEC Corp, S. 52-91.
- 1972, „Some empirical issues in the theory of transformational grammar“. In: Studies on Semantics in Generative Grammar. Hague: Mouton, S. 120-202.
- Duden 1973, Duden Grammatik der deutschen Gegenwartssprache, 3. Aufl., Mannheim: Bibliographisches Institut.
- Fillmore, J. Ch. 1968, „The Case for Case“. In: Emmon Bach/R. T. Harms (Hrsg.),

- Universals in Linguistic Theory. New York, Holt, Rinehart and Winston, S. 1-88.
- Jackendoff, R. S. 1972, Semantic Interpretation in Generative Grammar. Cambridge, Massachusetts and London: M. I. T. Press.
- Lakoff, G. 1969 a, „On derivational constraints“. In: Binnick (Hrsg.), Papers from the Fifth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society. Chicago. Department of Linguistics, S. 117-139.
- 1969 b, „On generative semantics“. In: Steinberg/Jakobovits, (Hrsg.), (1971), Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics, Anthropology and Psychology. London: Cambridge University Press, S. 232-296.
- Leech, G. N. 1969, Towards a Semantic Description of English. London: Longman.
- 1971, Meaning and the English Verb. London: Longman.
- McCawley, J. D. 1968 a, „The role of semantics in a grammar“. In: Bach/Harns (Hrsg.) Universals in Linguistic Theory. New York, Holt, Rinehart and Winston, S. 124-169.
- 1968 b, „Lexical insertion in a transformational grammar“. In: Darden (Hrsg.), 1968, Papers from the Fourth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society. Chicago, Department of Linguistics, Univ. of Chicago s. 71-80. Also In: Kuno/Hasegawa (Hrsg.), 1973, Grammar and Meaning (Papers on syntactic and semantic topics). Taishukan Publishing Company, Tokyo. S. 155-166.
- Mishiro, M. „Zur Wort- und Satzsemantik der deutschen Modalverben - Eine kleine Bestandsaufnahme-“. In: BEITRÄGE ZUR GERMANISTIK. The Proceedings of the Department of Foreign Languages and Literatures, College of General Education, Univ. of Tokyo, 1976 Vol. XXIV-1. S. 101-113.
- Raynaud, Franziska 1977, „Noch einmal Modalverben!“ In: Deutsche Sprache 1/1977, S. 1-30.
- Ross, J. R. 1969, „Auxiliaries as main verbs“. In: Studies in Philosophical Linguistics 1/1969. Evanston, Ill.: Great Expeditions, S. 77-102.

<なお本稿は、札幌で行なわれたドイツ文法理論研究会（1977年9月）での発表に加筆・修正したものである。>

（大学院博士課程）